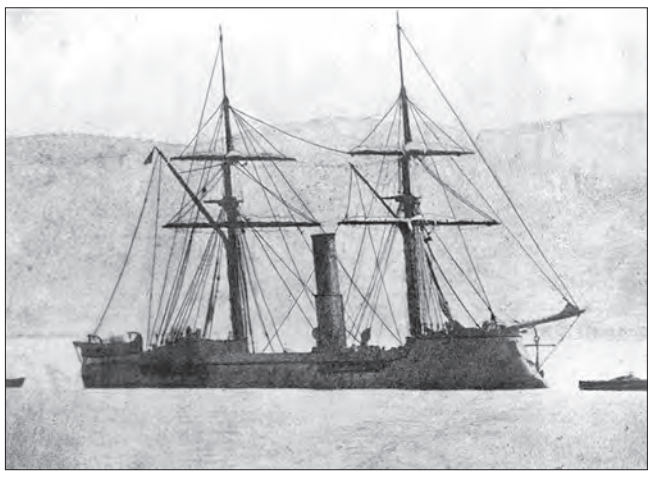
咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて⑩ ストーンウォール号の購入

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

小野遣米使節出発

咸臨丸太平洋横断航海での活躍によって将軍家茂から単独での御目見え（謁見）の栄を受け、陪臣から幕臣へ取り立てられた小野友五郎は、以来築地軍艦操練所教授として後進の指導、江戸湾海防計画立案と調査、港湾防御用蒸気砲艦の設計、小笠原群島領有権主張の為の調査と測量、横須賀製鉄所建設計画参画、長州征伐の兵站担当など、その才能を遺憾なく発揮して幕末の日本を支え、文字通り東奔西走の多忙を極めていた。そしてまた休む間もなく慶応三年（1867）、ブルーイン元公使に支払済みの軍艦代金60万ドルの精算と新たな軍艦及び武器購入の役目を担って、再び米国に派遣されることになった。



小野友五郎が買い付けた装鉄艦「ストーンウォール号」。アメリカから回航されてきたときは戊辰戦争の真っ最中で、ファルケンバーグ米国公使は中立を宣言して幕府と新政府の両海軍への引渡しを拒んだ。翌明治二年に新政府所属艦となり、のちに東艦（あずまかん）と命名され、日本海軍の主力として活躍した。

遣米使節団メンバー

正使：小野友五郎（勘定吟味役）
副使：松本寿太夫（開成所頭取並）
外国方：福沢諭吉（調役次席・翻訳御用）
外国方：津田仙弥（通弁御用出役）
外国方：尺（せき）振八（通弁御用雇）
海軍方：小笠原賢蔵（軍艦組一等士官）
海軍方：岩田平作（軍艦組一等士官）
勘定吟味方：神野信之丞（下役）
小野の従者：二名

シルトン家に残る小野使節団の記念写真。前列左より津田仙弥、小笠原賢蔵、小野友五郎、松本寿太夫、福沢諭吉。後列左より神野信之丞、R.S.シルトン、岩田平作、尺振八。
（ネット画像より転載）

副使の松本は徒目付として友五郎と小笠原群島回収に参加。外国方の福沢は三度目の外国渡航。津田と尺は優秀な通訳。海軍方は軍艦購入の相談役と日本への回航を担当する予定で、小笠原は軍艦操練所で小野の門下生、岩田は長崎海軍伝習所の第一期生で小野と同期であった。使節団のメンバーを見ると、まさに実務者が顔を揃えていた。

一月二十三日、米国太平洋郵船会社のコロラド号に乗艦して横浜を出発。小野らにとっては懐かしのサンフランシスコに到着した後、パナマを経由してニューヨークに周り、鉄路で目的地ワシントンに入った。

ブルック海尉との邂逅

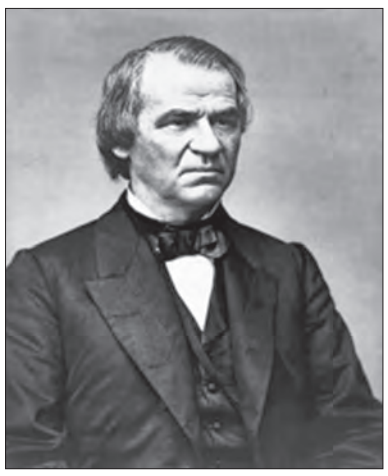
ウオルムレー・ホテルに投宿した小野に、思わぬ来客があった。咸臨丸太平洋航海での実質的な艦長を勤めてくれたジョン・ブルック元海尉が訪ねてきたのである。ブルックは航海の翌年に起こった南北戦争で両親の故郷ヴァージニアの南部海軍に所属して科学技術士官として働き、兵器・水路局長の地位に就いたが、その戦争中に最愛の妻を亡くすという不幸に見舞われていた。敗戦後は海軍に復職する為に必要な連邦海軍の赦免状が得られず、レキシントンのヴァージニア軍事大学の物理学・天文学の教授に転身していたのであった。

アメリカ海軍士官ブルック海尉。咸臨丸が厳冬の北太平洋の荒海を無事航海できたのは、ベテラン艦長ブルックと彼の部下たちの働きによるものであった。

小野から訪米の目的を聞いたブルックは、米海軍の軍艦の現況を説明して助言を与えてくれた。また購入軍艦が決定したら、自分が日本までの回航の艦長となり、その後は幕府海軍のために働きたいと申し出た。しかし小野は熟考の末、ブルックの高潔な人格と海軍士官としての技量は承知しているが、万が一の場合の保証という点で、回航は米国連邦海軍に一任すべきと判断した。また今後幕府ではイギリス海軍による伝習が行われる予定で、残念ながらブルックの活躍する余地はなく、申し出には断らず得なかった。小野はレキシントンに帰るブルックに、日本から持参したみやげを残された一人娘のために贈り、彼の気持ちに感謝した。小野は帰国後もお互いの国の教育システムなどについて文通し、咸臨丸太平洋横断航海に始まった海の男たちの固い友情は続いた。

大統領謁見とストーンウォール号購入

国務長官スワードに伴われてホワイトハウスを訪れた小野らは、慶応三年四月一日（1867年5月4日）ブルールームにおいて米国第十七代大統領アンドルー・ジョンソン夫妻に謁見し、小野が口上書を読み上げて尺（せき）が通訳した。身分は低いが英語力抜群の尺は、自身の実力によって日本の代表の通訳として米大統領に謁見することができたのであった。このあと一行は接伴官R.S.シルトンにホワイトハウス各ルームを案内された。



米国第十七代大統領アンドルー・ジョンソン。正使・小野をはじめとする一行は、ホワイトハウス・ブルールームで大統領夫妻に謁見した。

公式行事が済むと、小野はさっそくワシントン海軍工廠で軍艦を見学することになった。礼砲に迎えられた一行は、湾内に浮かぶ数々の候補艦の中に小野が気にかけていた装鉄艦があるのを見つけた。この装鉄艦が戦争末期に南軍がフランスに発注して建造された「ストーンウォール号」だった。ブルックからも予備知識を得ていたので、海軍方と協議していずれ将来は装鉄艦の時代になるだろうという予測から、ストーンウォール号の購入を決定した。購入代金は元値と同じ40万ドルであったが、この軍艦は航海性能もよく、随伴艦なしで回航できることも確かめられた。

武器購入と教育施設の視察

グラバー商会から購入した新式銃で武装した薩摩・長州などの西南雄藩に対抗する為の武器購入も担っていた小野の元に、北軍の英雄グラント将軍が訪ねてきた。彼は次期第十八代大統領となる人物である。グラントの狙いは南北戦争後の陸軍余剰兵器売却にあったが、小野はあくまで最新兵器のみに絞って検討し、7連発スペンサー・マスケット銃を千挺買い付け、加えて帰りのサンフランシスコで16連発ヘンリー・ライフル銃を300挺購入した。

小野らは海軍工廠や陸軍兵器廠での大きな任務を済ますと、特許庁や政府印刷所を視察調査して廻り、「珍物会所（スミソニアン博物館）」を訪問した。また教育施設の視察には特に力を入れ、ジョージタウン大学と傘下の各カレッジや盲唖学校での教育成果を見学し、小学校の授業も参観した。このときの視察はのちに、福沢の「慶応義塾」、尺の「共立学舎」、津田の「学農社」（農学校）や「楽善会」（盲唖教育）といった教育機関を創設する大きな成果をあげ、明治四年に六歳で米国に留学した津田の次女梅子が、明治三十三年に設立する「女子英学塾（津田塾大学）」に繋がった。また数学の大家であった小野は、生涯を通じ子どもの数学教育に関わった。

福沢諭吉の背任行為

実り多かった小野遣米使節団ではあったが、ひとつの問題を抱えていた。それは二度の渡航経験のある福沢諭吉が、実は英語の通訳、翻訳とも役に立たず、津田と尺にその負担が掛かることになったのである。また福沢が担当した事務作業も大きな失敗を重ねることになった。万延元年（1860）の遣米使節の渡航には大量の現金を持ち運んだのであったが、肥田浜五郎による横須賀・横浜製鉄所用の機械買い付けのオランダ出張（1864）の頃には為替を利用するようになった。そして今回は福沢がその為替を担当することになったが、ニューヨークで現金化出来ない問題が起きる。また福沢は自分の仕事を使用人を雇ってやらせようとするが、現地で雇ったチャールズという男に公金500ドルを持ち逃げされてしまう。極めつけは託送した船荷の荷揚げ交渉にもたついて、将軍からの贈り物が結局大統領謁見の日に間に合わなかった。

小野を訪ねてきた北軍の英雄グラント将軍。彼はのちに米国第十八代大統領となった。

渡米に際し福沢は五千両もの大金を用意していたが、実は本の買い付けという副業の目的を持っていたのである。しかし大きな使節団ならともかく、今回のような少人数の使節団の場合、一人の負担が大きく皆自分の職務で手一杯であり、福沢のように副業に気を取られ手を抜いた仕事はより目立つこととなった。

勘定吟味役の責任もある厳格な小野友五郎は、全員に私物の別送品の船賃は各自負担するよう言い渡すが、福沢は幕府の購入書籍と自分の購入品を一緒にして船賃を浮かせようとする。友五郎は運賃表を渡して精算するよう福沢に忠告するが、途中で運賃表を紛失した旨の報告をする始末であった。

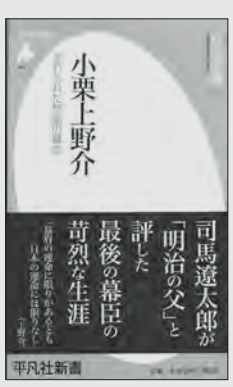
六月二十六日、五ヶ月ぶりに横浜に帰着すると、小野と副使の松本は福沢を告発し、神奈川奉行が福沢の荷を差し押さえた。福沢は謹慎処分を受け、小野と松本も部下不取締で進退伺いを出すといった騒ぎとなった。福沢が外国方に再出勤を許されたのは四ヵ月後のことである。結局この件はその後の幕府から明治政府への政権移譲でうやむやになるが、当時調停に奔走した外国奉行支配調役並格の福地源一郎の証言によると、福沢は公金を使用した買い物や私物運賃、為替差額金および幕府購入品の商人からのコミッション料など1万5千ドルを利得したと告白している。これは現在の一億円を軽く越える金額であり、一万円札でお馴染みの諭吉翁も、若い頃は目的の為には手段を選ばずといった、かなりのやり手であったことに驚かされる。（参考資料："福沢諭吉公金使込に関する件"藤井哲博氏著「小野友五郎の生涯」など）

小野の新たな叙任

福沢の件で進退伺いを出した小野友五郎であったが、幕府は有能な人材に暇を出すつもりなどさらさらなく、八月二十日に新設の「勘定頭取」に昇進させ、十月二十三日には勝手方勘定奉行並として諸大夫に叙任する。小野は陪臣からついに内膳正（ないぜんのしょう）を名乗るまでの大出世を果たしたのであった。

（続く）

お知らせ

昨年12月に平凡社新書として「小栗上野介」が刊行されました。著者は上野介菩提寺住職の村上泰賢氏で、氏は幕末の日本を支え、近代化に尽力した小栗上野介の顕彰活動を長年にわたり続けておられます。

今回刊行された「小栗上野介」は、氏ならではの幅広い知識と深い洞察力で、小栗の事績を捉えています。丹念に文献を読み解き、ディテールまで詳しく描写する内容は、小栗ファンにも新鮮な驚きをもたらすことでしょう。そしてこれから小栗のことを知りたいといった方には、その丁寧で読みやすい文章は絶好の入門書となるはずです。この本は小栗関連の本のなかでは決定版と呼べるもので、ぜひ一読をお勧めしたいと思います。